

「非認知能力等に係るデータ分析」

研究の概要

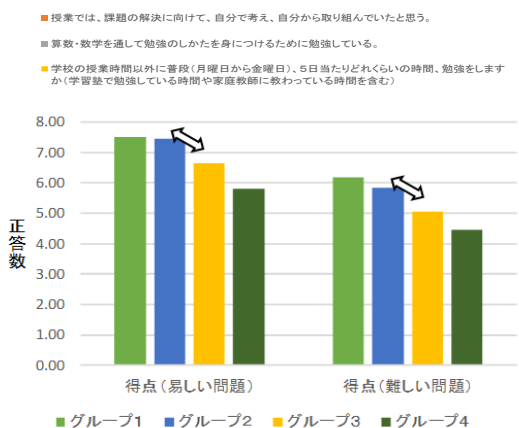
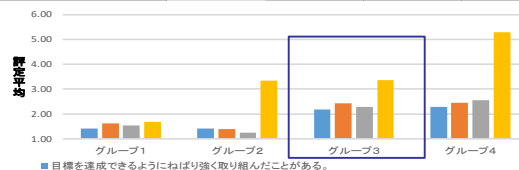
- ◆**課題認識** 教育実践の取り組みをとおして、非認知能力を育成するには、どのようにすればよいのか、データを基に検討したい。
- ◆**研究の目的** 「未来への一步」を活用した学力向上の取り組みの結果データ等に基づき、各データどうしの関係を分析することで、学力向上にむけた効果的な取り組み、非認知的能力と学力との相関、効果的な取り組みとするための視点等を明らかにし福岡県の学力向上を図ること。
- ◆**研究の方法** 「未来への一步」を活用した学力向上の取り組みの実施。年2回（6月・12月）に「定着状況診断テスト」・「児童生徒質問紙調査」を実施し、そのデータの集計・分析を実施する。（対象となる児童生徒数の総計はおよそ1万7千名）

研究のポイント・成果

◆研究のポイント（一部を紹介）

- ①非認知能力と学習時間の回答をもとにしたクラスター分析した結果、児童・生徒を4グループに分けることができた。（得点が低いほど望ましい結果）。
- ②グループ1は、非認知的能力への自己評価が高く、学習時間も長いグループで到達度（正答数）も高くなっている（図は、例として本調査小学6年生）。グループ2、3は、学習時間については同程度であるにもかかわらず、到達度に差が出ており、非認知的能力を高く自己評価しているグループ2の方で高くなっている。学習時間の確保だけでは、学習成果につながらない可能性がある。
- ③どの学年も40%程度の児童・生徒がこのグループ3に分類された。学習時間が比較的確保されているにもかかわらず、非認知的能力についての自己評価が低いグループ3の児童・生徒の非認知的能力を高めるとともに、到達度を高めるような支援が必要であると考えられる。

グループ	1	2	3	4
非認知的能力	○	○	△	△
学習時間	○	△	△	×



今後の課題

◆データ分析を活かした教育改善に向けて

今回の調査では、マークシートの読み込みをすることで、従来の教員が手入力にてデータ入力をする手法に比べれば、集計コストは大幅に削減されたが、今後は、EdTech（つまり、教育におけるAI、ビッグデータ等の様々な新しいテクノロジーを活用したあらゆる取り組み）の活用を視野に、GIGAスクール構想で整備されたICT環境を活用したデータ収集・分析の仕組みを構築していく必要がある。